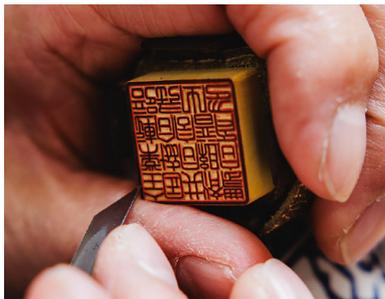


印章彫刻技能士

竹口雅樹

細部にわたって精巧な技術が注ぎ込まれている「東京手彫り印章」。その技を受け継ぎ、磨き上げ、次の世代へと確かにつないでいく。



「髪の毛一本」と表現される細さの文字。「彫ることよりも、バランスを考えて印稿を書くのが一番難しい」と竹口さん

人生の節目に寄り添う、大切なもの

「銀行員の方に聞いたのですが、「印章をないがしろにするところには融資をするな」と言われているそうです。印章は信用の証とされているんですね」



先達の技術を受け継ぎ、伝統工芸品に認定

電子署名の普及により、印章(はんこ)の役割は縮小しているといわれている。「たしかに、東京印章協同組合に加盟する印章店は、一九八〇年には七百社以上ありましたが、二〇二六年現在は百を切っています」と話すのは、中央区役所にほど近い「竹口三正堂」の二代目・竹口雅樹さん。だが、これからも印章、とりわけ手彫りのものの役割は無くなることはないだろうと力を込める。「印章は、『私が私である』ことを公に認める大切なもの。中でも手彫りのものは、同一のものがこの世に二つとない、唯一無二のものです。機械で量産された印章とは違い、お客様のご希望をお伺いし

たのち、文字を彫り、その人だけの印影が生まれます。責任を伴う場面や人生の節目などで、今も手彫りの印章を求める方が少なくありません」福井県敦賀市出身の父・政春さんは、手に職をつけたいと上京して日本橋の印章店で修業した。竹口さんが店を継いだのは、大学卒業後の一九八二年。手彫りの技術は組合の講習会で修得した。「昔は徒弟制度だったのですが、私の頃には業界全体で技能士を育てる仕組みが整っていて、講習会では初等科から専修教室まで段階的に学べるようになっていました。私は十年以上通い、最終的に専修教室まで進んで印章彫刻一級技能士の資格を取得しました。指導してくださった先生方はいずれも一流で、なかでも専修教室を担当された講師の小川政一先

生は、印章構成法で印章に使用する書体、特に小篆(しょうせん)を印の中に収めることとで名匠として知られています」竹口さんが取り組む「東京手彫り印章」は、江戸時代に幕府や諸大名の印章を手がけた「御印判師」を源流とする技法だ。印稿作り(原稿を書く)、朱打ち(印面に朱を塗る)、字入れ(逆さ文字を筆で書き入れる)、荒彫り、墨打ち(墨を乗せる)、仕上げ(仕上げ刀で整える)といった工程を、ひとりの職人がすべて手作業で行い、その姿は四百年を経た今も変わらない。荒彫りでは髪の毛一本ほどの細さの文字を、傷つけないように慎重に彫っていく。

自分たちの技術には大きな価値があるのではないかと——そう考え「東京手彫り印章」としてのブランドینگに取り組み始めたきっかけは、中央区による地域の商業振興に関するアンケート調査だったという。「印章が文房具ではなく、伝統工芸品」として位置づけられていることを知り、自分でも目から鱗でした。区がそう認めてくれていたのなら、東京都にも働きかけようと、私が組合理事長になってから老舗の印章店の皆さんにも協力いただきながら申請を進めました。その結果、東京都伝統工芸品の認定を受け、さらに一年後の二〇二五年十月には経済産業省指定の伝統的工芸品にも選んでいただくことができました」

自分を育ててくれた業界への恩返しを果たした竹口さん。現在は息子の祐樹さんも店頭に立ち、手彫りの技は確かに次の世代へと受け継がれている。

たけぐち まさき ●
1959 年 生まれ。竹口三正堂 2 代目。
東京都中央区新富 2-4-4